

旺文社
国語辞典

(新版)

大活字版



本居宣長著

編者 守隨憲治 今泉忠義 松村明

教育のための出版社



旺文社の事業

事業	放送	書籍	雑誌
進学模擬試験		高校生向け学習参考書	中学生向け学習参考書
大学受験立派ラン	日本歴史ラジオ講座	教科書(高校英語・数学・国語) 学習図鑑・科学書(コスマスその他) 辞典・事典・語学教材 文庫・児童書・スポーツ書	中学生向け学習参考書 高校生向け学習参考書 小中学生向け学習参考書 中高二年時代 中高一時代 中高三時代 中二時代 中一時代 雪時代 雪短大

〔関連団体〕
 <国際誌の刊行> 旺文社インターナショナル
 <通信教育> 財團法人 日本英語教育協会
 <LL教室> 財團法人 日本LL教育センター
 <学生のホテル> 日本学生会館

□「図書案内(小、中、高・一般別)」送呈。

〒162 東京都新宿区横寺町 旺文社

●旺文社のマークが新しくなりました。これは情報産業と教育産業の動的な連環と、《旺》の文字が意味する「昇る太陽の躍動、ダイナミックサンライズ」をかたどり発展する企業イメージを表したものです。このマークは、1984年ロサンゼルス・オリンピックのシンボルマークをデザインしたロバート・M・ラニアンによって制作されたものです。

旺文社 国語辞典
〔大活字版〕

1982年1月20日 初版発行
1983年 重版発行

乱丁・落丁はお取りかえしますので、本社に直接お申し出ください。

編者	行人	守今	随	憲忠	治義明
発行	人所	松赤	泉尾	好行	雄夫
編印	所	中共	山村	式会	社社
付物	所	同成	市川	式製	所会
製本	所	株	清水	株式	式会
製函	所	工	印刷	工紙	社

發行所	株式会社	旺文
	162 東京都新宿区横寺町	社
	(編集) 03-266-6356	
	(販売) 03-266-6416	

ISBN4-01-072115-4

209111

© 旺文社 1982

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

Printed in Japan

能率見出し(実用新案登録490575, 515397, 515398)

新能率見出し(実用新案登録894300, 894301, 894302)

五十音索引

(数字はページを示す)

ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
1254	1223	1179	1135	1065	894	836	671	418	160	9
*	る	り	*	み	ひ	に	ち	し	き	い
1233	1167		1083	943	859	718	456	241	47	
*	*	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
1204	1149	1100		978		747	585	299	86	
*	ゑ	れ	*	め	へ	ね	て	せ	け	え
1254	1236		1110	1019	877	766	607	326	108	
*	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
1234	1215	1162	1120	1034	885	794	645	357	122	

編 者 の こ と ば

人間の社会生活において、言語の果たす役割はまことに大きい。それによって人々は意思を通じ合うことができる。また、文化の蓄積・伝達・伝承のための手段として言語の機能は重要である。そして、人間がものごとを考えるとき、言語は思考のささえになる。ところで、言語はいつも同じ状態でとどまることなく、時代とともに変化する性質をもつ。一つの言語が他の言語に影響をあたえることも多い。われわれの国語に限ってみても、近年の交通機関や通信機関の著しい発達で世界はせまくなり、外国語の影響もますます大きくなっている。また、新語が生まれる一方で使われないことばもでてくる。現代語を収める辞書としては、変化することばを究明して、たえず脱皮をはかり、内容の吟味を継続して行う必要がある。

「旺文社国語辞典」が世に出てすでに二十二年になる。一九五八年に誕生し、その後一九六五年、一九七〇年、一九七三年と三回にわたって改訂を行ってきた。その間、私たちはこの辞典を常に時代の要求に応えられる清新な国語辞典とすることを念願して努力を重ね、それは幸いにして学生諸君をはじめ一般社会人の方々にも広く愛用されてきた。

今回の改訂で特に力を注いだのは、語彙の再検討、新語の増補のほか、語釈を徹底的に吟味し、生きた用例の収録につとめたことである。そのほか、本書の初版以来の特色である独特の見出し項目と、特設欄による多角的解説をさらに充実させたこともあげておきたい。具体的には、固有名詞、和歌・俳句、故事・ことわざ・慣用句、重要な一字の漢字まで見出しに立て、また、注意・参考・語法・故事の各欄に加え、新たに語源・用法の欄を設けたことなどである。さらに、今回の改訂において「常用漢字表」を新たに採用し、全面的に新しい国語の書き表し方を示した。新時代の国語生活に十分活用され、役立つものとなるう。なお、今回の改訂にあたって山口明穂氏をはじめ青木一男・安西健夫・飯田満寿男・中村幸弘・森昇一の各氏には編集委員として、終始献身的なご協力をいただいた。執筆面で多大のご支援を賜った学友諸氏とあわせて深甚の謝意を表したい。

刊行にあたり

戰後すでに三十五年の歳月が経た。現代の二十年、三十年はよく過去における何百年と同等にみたでられ、物事の急速な変化や發展ぶりが強調される。時代の流れはまことに激しいものがあり、現代の国語についてみても、高度化した科学文化、社会生活を反映して、それはますます複雑多岐になりつつある。このような時代には、ことばの知識や情報を収める国語辞典の役割はいつそう重要なものになってくる。

旺文社国語辞典は、一九五八年の初版刊行以来、たえず時代の要請に合致して、広範な用途に応じられる立体的辞典として好評をはくしてきた。これまで、三度にわたる改訂で収録語彙の拡大と内容の充実をはかつてきただが、今回、さらに全面改訂を行うことにより、より利用度の高い辞典として、新しい時代の国語生活に役だつことを願つた。

今回の改訂の主要な点をとりあげると次の通りである。まず版面を大きくして収載量をふやし、語義解説など内容全般に拡充

をはかった。次に、収録する語彙を再検討し、新語、外来語、時事語も的確な選択を行つて大幅に増補した。また、語訳を徹底的に再吟味し、用例も、より適切なものを選避して収録した。さらに、本辞典の特色である学習性を強化し、従来の「注意」「参考」「語法」「故事」の各欄に加えて「語源」欄と「用法」欄を新設した。

なお、今回の改訂では、「常用漢字表」を採用し、全面的に新しい国語の表記基準を示した。日常の学習、実務に十分活用していただきたい。以下この辞典の特長とするところをあげてみよう。

一、学習と日常生活に必要なあらゆる分野のことば約七万六千語を収録した。

現代の国語を中心とし、主要な外来語、漢語、古語、新語、百科語などを幅広く収め、各科の学習にも、また複雑さを増していいる現代社会の国語生活にも即応できるものとした。

一、固有名詞、和歌・俳句、故事・ことわざ・慣用句を豊富に収めて国語学習に万全を期した。

故事・ことわざ・慣用句などとともに、中学・高校の教科書、あるいは新聞や雑誌によく出る人名・地名・書名などの固有名詞、和歌・俳句など、通常の国語辞典にはみられない項目をも見出しに立て、解説を施した。これらのうち、「故事・ことわざ」「和歌・俳句」の二項目については、巻末付録に索引を設けて学習しやすくなづいた。

一、「常用漢字表」を新たに採用し、全面的に新しい国語の書き表し方を示した。

国語審議会によって長期にわたり検討され、先にまとめられた「常用漢字表」を全面的に採用、現代国語表記の基準を示した。現代かなづか

新送り仮名とあわせて、最新の国語の書き表し方を示すものである。

一、語義解説は簡明・正確・平易を期し、適切な用例を示して語義理解に役だてた。

語義・説明は、簡潔・正確でしかもわかりやすいものとするよう工夫し、活用度の高い重要語には徹底的解説を施した。さらに適切な用例をできるだけ多く示して、語義を正しく、より深く理解できるように努めた。

一、高い実用性と学習性をもつ本書独自の欄を豊富に設けた。

語義解説、用例だけでなく、必要に応じて、「語源」「用法」「語法」「注意」「参考」「故事」の各欄を設けて、関連事項をできる限り広く深く解説し、より高い実用性と学習性を盛り込んだ。

一、漢字を重視し、大見出しの漢字を掲げて解説を徹底させ、漢字辞典の機能を加えた。

日常生活で、使われるこの多い漢字、総数約二四〇〇字を一字の漢字として大活字で掲げ、その音訓と字義解説、さらに参考事項の解説を示して、漢字辞典としても十分利用できるものとした。また巻末付録に「筆順つき漢字音訓表」も設けた。

一、国語の学習はもちろん、日常生活や実務に直接役だつ豊富な記事を付録として巻末に収めた。

付録には「国語表記の基準」「教語の使い方」「日本語の発音とアクセント」「国文法要覧」「世界文化史年表」など国語の学習と実用に直接役だつ十五項目を掲げて、この辞書の利用度を一段と高いものにした。

おわりに、新版刊行にあたり、立案から校正に至る長い期間、熱心なご指導とご労苦を賜った編者と編集委員の方々に心から謝意を表したい。また執筆校正に多大のご協力をいただいた方々を左に記して、厚くお礼を申しあげる次第である。

荒木雅実・伊東倫厚・岩井堯彦・岩下裕一・岡田潔・沖森卓也・加島直吉・木下和子・黒瀬崇・小久保崇明・近藤泰弘・
佐藤喜一・島田耕治・平館英子・田貝晃・竹中泰正・多田一臣・立平幾三郎・千葉豊・成清良孝・西田絢子・花輪茂道・
藤原克己・松原純一・身崎寿・山崎一穎・和田強(敬称略、五十音順)

なお、巻末付録「日本語の発音とアクセント」をご執筆賜った平山輝男先生に深く感謝申し上げたい。

最後に、この辞典の編者である今泉忠義先生が先年亡くなられた。初版以来、先生には絶大なご尽力を賜った。改めて深く感謝するとともに、心から冥福をお祈りする次第である。

この辞典のさまりと使い方

〔一〕 見出し語の範囲

この辞典は、日常の言語生活を円滑に進めていく上で欠くべからざる知識を求めて作られたものであつて、見出し項目として掲げたものはその目的にかなうよう、現代の日本語を中心とし、主要な外来語、百科語、古語、固有名詞（人名・地名・作品名など）、慣用句、ことわざ、故事成語、著名な和歌・俳句、および二四〇〇余字の漢字である。

〔二〕 見出し語

(1) 原則として現代仮名遣い・太字で表記した。ただし、

〔7〕 外来語は片仮名で表記した。

(4) 古語・百人一首は歴史的仮名遣いで表記したが、古語・現代語にわたるものは現代仮名遣いで見出しを表記した。

例 いらぶ【答ふ。応ふ】(自下二)【古】ださる。返答をする。

たちかえる【立ち返る】(自五)【古】たらは接頭語
① かかる。れる。〔本論〕「」② 引き返す。〔古〕「」かえす。可能たら
かえ・れる(自下)

(2) 一字の漢字（大活字）のものは、字音を見出しどとした。

(3) 見出し語を構成する要素を「-」を用いて区切り、語の構成を明らかにした。
例 あさひ【朝日・旭】〔山桜〕

やまとざくら【山桜】

ただし、單語と單語が連なつた場合は最小単位に区切らず、意味のとりやすいよ

うに單語と單語を大きく区切つた。

例 じゆうしゅぎ【自由主義】
ねつとうりょう【熱容量】

あいへつりーく【愛別離苦】

(4) 固有名詞・枕詞・慣用句やことわざなどは、一部を除いて「-」をは

ぶいた。

(4) 活用語は原則として終止形を掲げ、語幹と語尾の区別を「・」で示した。形容詞は語幹を掲げた。

〔二〕 あそぶ【遊ぶ】

あそぶか【明らか】

(5) 副詞に「と」あるいは「に」がついてもつかなくとも使われるものは、つぎの形式によつた。

〔三〕 かる・がる(と)【軽軽(と)】

(6) 和歌・俳句は、第一句めを平仮名で見出しどした。

〔四〕 ひさかたの【久方の】

(7) 三字以上の見出し語（漢字一字の字音語の場合を除く）に、他の語がついてできた複合語は、その見出し語の後に一括して掲げ、親見出しが当たる部分は「-」で掲げた。これらはそれぞれ行を改めて掲げた。ただし、検索の便宜上、この形式をとらず、独立見出しどしたものもある。

〔五〕 こうとう【高等】

〔六〕 かこう【学校】

(8) ある見出し語に、他の語句がついてできた慣用連語・ことわざ・格言など

は、その見出し語との重複部分に「-」を用い、平仮名・太字で表記し、漢字を（）に包んで示した。冒頭部分が活用語で、見出しど語形のかわる場合は「-」を用い、全形を掲げた。これらは、行を改めず追い込みで掲げた。

〔七〕 あき【秋】

〔八〕 一のそら(空)

〔九〕 一のおうぎ(扇)

あたる【當「た」る】
あたらずといどもとお(遠)からず

……もはつけ(八卦)あたらぬもはつけ(八卦)…

検索の便宜上、独立見出しど掲げたものもある。

〔十〕 いわぬがはな【言わぬが花】

(9) 接頭語には見出しの下に、接尾語には見出しの上に「-」をついた。

例 うち〔打ち〕 あい〔相〕

たち〔達〕

は・む

〔三〕 見出し語の配列

見出し語は、つきの順序によつて配列した。

- (1) 五十音順
(2) 漢音・濁音・半濁音の順

例 はん〔班〕
ばん〔番〕

- (3) 促音・拗音・直音の順

例 てつまむ〔鉄器〕
てつまき〔手付き〕

例 きよもつ〔器用〕

(4) つづりが同じ場合——語の種類と品詞別によつてつきの順に配列した。

① 一字の漢字（大活字） ② 接頭語 ③ 接尾語 ④ 名詞 ⑤ 代名詞

⑥ 自動詞 ⑦ 他動詞 ⑧ 补助動詞 ⑨ 形容詞 ⑩ 形容動詞 ⑪ 連体詞

⑫ 副詞 ⑬ 接続詞 ⑭ 感動詞 ⑮ 格助詞 ⑯ 接続助詞 ⑰ 係助詞

⑲ 副助詞 ⑳ 間接助詞 ㉑ 助動詞

ただし、一字の漢字と同じ漢字表記をもつ接頭語・接尾語・名詞(4)

検索の便宜上、一字の漢字の直後に配列した。

(5) 配列の上での外来語の長音「-」の扱いは、「-」の前にくる音の母音により、アイウエオのいずれかに当たるものとみなす。例えば、ターミナルはタアミナル、チーズはチイズ、ブルはブル、ケーキはケエキ、クロースはクロオスとみなして配列した。

〔四〕 見出し語の書き表し方

(1) 見出し語の書き表し方を〔〕の中に示した。いくつかの単語が結びついている連語等については〔〕の中に入れた。仮名は、原則として平仮名を用

い、現代仮名遣いで示したが、見出し語が古語の場合は、歴史的仮名遣いで示した。

(2) 「常用漢字表」にある漢字の字体は、「常用漢字表」に従つた。

この辞典のきまりと使い方

(3) 送り仮名は、昭和四十八年六月内閣告示「送り仮名の付け方」（昭和五十六年十月内閣告示にて一部改正。〔国〕マージ参照）に従つた。

送り仮名をはぶくことの許容される語は、()のよう示した。()に包まれているものは、はぶいてもよいことを表す。)

例 とら・える〔捕〔ら〕える。捉える〕

たうえ〔田植〔え〕〕

送り仮名をはぶくのが本則の場合には、許容を()に包んで示した。

例 おこな・う〔行う。(行なう)〕

(4) ()の中の漢字につきの記号をつけて漢字の種別を示した。ただし、固有名詞、慣用連語など、および中国語にはこの記号をはぶいた。

例 「常用漢字表」にない字

。「常用漢字表」にあるが、その音または訓が掲げられていない読み

× 従来あて字と考えられた字

(5) 外来語の原語つづりは()の中に示し、英語を除いて該当する国語名を略語(ハーフジン「略語・記号表」参照)を用いて示した。

例 カプセル〔Kapsel〕

モンタージュ〔montage〕

たばこ〔tabacco〕

ギョーザ〔中國子〕

(6) 英語のつづりは、米英両式がある場合は原則として米式とし、また、いわゆる和製英語は「和」の略語をつけた。

例 ユーモア〔humor〕

ナイター〔nighter〕

〔五〕 歴史的仮名遣い

(1) 見出し語の表記形()の下に歴史的仮名遣いを片仮名で示した。

(2) 見出しが歴史的仮名遣いで表された古語には、現代仮名遣いを平仮名で示した。

(3) 見出しの仮名遣いと一致する部分は、語構成単位に「-」で示した。

例 けいこう〔傾向〕

ゆめ・ぐくよ〔夕・月夜〕

〔六〕 品詞および活用

の中に示したものや、独立見出でないものの〔〔〕〕のようない例)には連語
標示はしなかった。

(1) 見出し語には、品詞および活用の型を()に包み略語で示した。ただし、名詞だけの場合は品詞名を省略した。(ページ「略語・記号表」参照)

(2) 品詞の分類および活用の種類については、基本的に現行の学校教科書の一般的なものに従つた。ただし、一部のものについては、さらにくわしくつぎの形式によつた。

(3) 名詞のうち、代名詞は(代)として区別した。

(4) 普通名詞のなかで、動詞のサ変および形容動詞の語幹となるものについては、それぞれ品詞名を併記し、語尾活用の基本形を示した。

例 めいき(明記)(名他スル)

おんわ(温和)〔名・形動タ〕

(5) 動詞は、自動詞・他動詞・補助動詞の区別を示した。

(6) 助詞はつぎの六分類に従い、それぞれ略語で示した。

格助詞・接続助詞・係助詞・副助詞・終助詞・間投助詞

(7) 口語の動詞・形容詞・形容動詞・助動詞、および文語の助動詞には各活用形を示した。

(8) 未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形(已然形)・命令形の順に「・」で区切つた。

(9) 一つの活用段に二つ以上の形がある場合には、一方を()で包み、活用形のない段には「〇」を入れた。

例 だだしい(正しい)(形)〔カ・ハ・キ〕

(10) 名詞とサ変動詞、名詞と形容動詞のように二つ以上の品詞に属するものは活用形を省略した。

(11) 助動詞は、(助動下一型) (助動形動型) のように、活用の型を示した。

(12) (外)の標示は、口語では見出し語に「と」がついて副詞、「たる」がついて連体詞となることを表す。文語では「タリ活用」といわれるものである。

例 どう・どう(堂堂)〔タリ・タリ〕

(13) 二つ以上の單語が合わされてできた複合語も一語意識の強いものは單語として扱い、いずれかの品詞名を示した。

(14) 二つ以上の単語が結びついている連語で、ふつう、漢字を含んで書き表さないものは、(連語)として示した。ただし、見出し語の書き表し方を〔 〕

〔七〕 語釈・解説、および用例

(1) 古語・俗語・方言・枕詞などの語の種類、百科語の区分は、それぞれ略語を用いて標示した。(ページ「略語・記号表」参照)

(2) 語釈・解説は、その語の基本的な意味を明らかにすることにつとめるとともに、現代語としての意味・用法ができるだけもらさないようにした。

(3) 一つの見出し語に二つ以上の意味があるときは、①②③…を用いて分け、①②③…のそれぞれをさらに細分するときは、④⑤⑥…を用いて分けた。

また、品詞が異なって意味も異なるとき、および動詞で自動詞・他動詞・補助動詞があり、意味が異なるときは〔 〕…を用いて分けた。

(4) 語釈・解説にあつては、できるだけ補足的説明、例えば原義、見出し語の漢字の字義に即した説明などを〔 〕に用んで加えた。

(5) 見出し語が口語の動詞、形容詞、形容動詞の場合には、語釈・解説のあとにその語と関係の深いつきの語を掲げた。

(6) 見出し語が動詞の場合
① 他動詞に対する自動詞と、その活用型。自動詞に対する他動詞と、その活用型。また、見出し語の文語の語形と活用型。
例 たら・ねる(連ねる・列ねる)(他下)〔タラ・ネル〕

(7) 可能動詞(五段活用動詞が下一段に活用して可能の意をもつ動詞)
例 うこごく(動く)(自五)〔ウコゴク〕

(8) 見出し語が形容詞・形容動詞の場合
① 対義語・対応語をつきの形式で示した。

例 あつ・い(暑い)〔アツイ〕

ただし、対義語・対応語が、①②…で区分されたいくつかの語義に通用する場合は、それらの語義のあとに〔 〕に包んで示した。

例 うつくし・い(美しい)〔ウツクシイ〕

しゃか(静か)〔ヤカ〕

國

おもい【重い】(形) イガタシ ①自方が多い。おもい。「荷物が」。

②大切だ。重要な。「任務」③悪い。程度がはなはだしい。ひどい。

「病気が」…………(↑軽い)

(7)意味の理解を助けるため、必要に応じて用例をつきの要領で示した。

(7)現代語の用例は現代仮名遣い、古語の用例は歴史的仮名遣いで示した。

古語の用例には原則として出典を示した。「物語」「日記」「和歌集」などの出典名は、これらをはぶいて「源氏」「更級」「古今」などのように略称で示した。

(1)用例中の見出し語にあたる部分は「一」を用い、見出し語が動詞・形容詞などで、活用して見出し語と語形が変わった場合には、語幹を「一」で、語尾は「・」で区切って仮名で表した。

國 いたい【痛い】(形) イハシ ①…………。「足が」

②…………。(チヤンスを逃がしたのは、かつた)

(ウ)語幹・語尾の区別のない動詞、および助動詞の用例が活用して見出し語と語形が変わる場合は、見出し語に相当する部分を太字で示した。

國 みる【見る】(他上) ミル ①……。「みれば」ほく美しい」

せる(助動下一型) セル ①……。「使いに行か」②……。「病

気のため休ませて」「だく」

〔八〕 一字の漢字

(1)「常用漢字表」にある漢字、人名用漢字、およびそれ以外で一般社会生活中に用いられることが多い漢字、約二四五〇字を収めてその字義を解説した。

(2)見出し 漢字の字音を見出しとし、「常用漢字表」に字音が二つ以上掲げられている場合は、そのすべてを見出として掲げ、字義解説はより一般的と思われる字音見出しの項に掲げた。

(3)字体

(4)他の項目より大きい活字で【】の中に漢字を示した。

(4)「常用漢字表」にある漢字の字体は「常用漢字表」に、人名用漢字は人名用として示された字体に従つた。

(5)「常用漢字表」にある漢字で、いわゆる新字体と旧字体との両字体がある漢字については、新字体の下にやや小さい活字で旧字体を掲げた。人名用漢字で旧字体のあるものは人名用漢字の字体の下に掲げた。

この辞典のきまりと使い方

(4)「常用漢字表」にない漢字には一般項目と同じ「▲」を、人名用漢字には「人」を付けた。

〔四〕 音訓

(1)字音を片仮名で、字訓を平仮名で示した。

(1)「常用漢字表」にある漢字については、「常用漢字表」に掲げられている音訓は太字で示した。ただし、字訓については送り仮名の部分は細字で示した。また、「常用漢字表」には掲げられていない音訓も、一般によく使われる代表的なものは細字で示した。(2)「常用漢字表」にない漢字の音訓は細字で示した。(3)字音には歴史的仮名遣いを添えた。

(5)字義、その他

(1)熟語を構成する成分としての字義をもれなく掲げ、各字義についての用例を「」に示した。

(1)字義解説のあとに、参考には略語としての用い方などを、国産には主として字体についての注意事項を、また、△をつけてその漢字が特殊な読みの熟語となる場合の例を示した。さらに、その漢字が人名として用いられる場合の読みを実際例にもどついて人名の下に示した。

(4)同じ意で使われる漢字をリード示した。

〔九〕 「注意」「用法」「語源」「語法」「参考」「故事」欄

見出し語の理解をいつそう深め徹底させるために、語釈・解説のほかに、つぎの欄を設けて多角的な解説を施した。

(1)注意 見出し語の読み方、書き方、使い方の上で誤りやすい事がらを指摘し、注意を要する事がらを解説した。

(2)用法 見出し語の、日常生活での正しい使い方に關する事項を解説した。

(3)語源 見出し語についてのより深い理解に役立つよう、その成立過程を解説した。

(4)語法 語の構成、語の文法を主とした用法、口語の助詞・助動詞の接続などを解説した。

(5)参考 見出し語と類語・関連語との区別や使い分け、語釈・解説を別の角度からみた説明、その他見出し語に關係する事項を解説した。

(6)歴史 中國の古典に出るいわゆる故事を簡潔にわかりやすく掲げ、末尾に出典名をへんに示した。

[十] 和歌・俳句、および俳句の季語

(1) 中学校、高等学校の国語教科書や参考書にあらわされる現代短歌・現代俳句を、その頻度などを基礎にして約一五〇を本文に採録した。古典関係の和歌は小倉百人一首に限った。(三三六ページ「和歌・俳句索引」参照)

(2) 本文に採録した俳句、およびその他の一般項目で俳句の季語となるものには語釋・解説のあとに春夏秋冬季語をつけて季を示した。季に異説のある場合、および親語から派生した語の季語は()に包んで示した。

略語・記号表

〔品詞・活用など〕	〔字義〕	〔一字の漢字の意味〕
〔接尾語〕	〔接頭語〕	〔接尾語〕
〔名詞〕	〔代名詞〕	〔自動詞〕
〔代動詞〕	〔形容動詞〕	〔補助動詞〕
〔連体詞〕	〔連用形動詞〕	〔副動詞〕
〔形動〕	〔形動〕	〔他動詞〕
〔連感〕	〔連感〕	〔補動〕
〔副感〕	〔副感〕	〔接助詞〕
〔接助〕	〔接助〕	〔副助〕
〔連助〕	〔連助〕	〔副助〕
〔助助〕	〔助助〕	〔助助〕
〔終助〕	〔終助〕	〔終助〕
〔周助〕	〔周助〕	〔周助〕
〔連語〕	〔口語動詞の四段活用〕	〔口語動詞の五段活用〕
〔可能動詞〕	〔可能動詞〕	〔可能動詞〕

〔百科語など〕	〔文法〕	〔世文〕	〔日文〕	〔社会〕	〔日本史〕	〔世界史〕
〔農業〕	〔文学〕	〔商〕	〔水産〕	〔宗教〕	〔水〕	〔水産〕
〔商業〕	〔文法〕	〔基〕	〔仏教〕	〔基督教〕	〔水〕	〔宗教〕
〔数学〕	〔世界史〕	〔キリスト教〕	〔天文学〕	〔天文学〕	〔天〕	〔天文学〕
〔物理学〕	〔人文地理〕	〔哲〕	〔海洋〕	〔地質〕	〔地〕	〔地質〕
〔化学〕	〔人文地理〕	〔論理学〕	〔氣象〕	〔動植物〕	〔法〕	〔法〕
〔生物学〕	〔心理学〕	〔心〕	〔地球〕	〔植物〕	〔社〕	〔社会〕
〔医学〕	〔心論〕	〔外來語など〕	〔地球〕	〔動物〕	〔経〕	〔経〕
〔生理学〕	〔心理学〕	〔イタリア語〕	〔地球〕	〔微生物〕	〔法〕	〔法〕
〔建築〕	〔オランダ語〕	〔ギリシャ語〕	〔微生物〕	〔微生物〕	〔社会〕	〔社会〕
〔服飾・和洋裁縫〕	〔サンスクリット語〕	〔サムシラ語〕	〔微生物〕	〔微生物〕	〔社会〕	〔社会〕
〔枕〕	〔ラテン語〕	〔スペイン語〕	〔微生物〕	〔微生物〕	〔社会〕	〔社会〕
〔枕〕	〔英語〕	〔フランス語〕	〔微生物〕	〔微生物〕	〔社会〕	〔社会〕

[十一] 特 錄

録

卷末に学習と一般社会生活に役だつ多くの記事を付録として掲げた。

- (1) 国語表記の基準 (2) 故語の使い方 (3) 日本語の発音とアクセント
 (4) 国文法要覧 (5) 季語集 (6) 手紙の書き方 (7) 世界文化史年表

- (8) 方位・時刻表、干支順位表 (9) 年中行事一覧 (10) 数量呼称一覧
 (11) 度量衡表 (12) 漢字部首名称一覧 (13) 筆順つき漢字音訓表
 (14) 故事・ことわざ索引 (15) 和歌・俳句索引 (16) 和歌・俳句索引
 (17) 和歌・俳句索引 (18) 和歌・俳句索引 (19) 和歌・俳句索引

〔古〕	〔古語〕
〔漢字につけた記号〕	
〔俗〕	〔俗語〕
〔同意の漢字〕	〔常用漢字表にない漢字〕
〔対義語・対応語〕	〔常用漢字表にある漢字で、その音または訓が掲げられていない読み〕
〔語根がなく、他の見出しを参照する〕	〔あて字と考えられる字〕
〔語根があり、なお、他の見出しを参照する〕	〔その他〕
〔語根があり、なお、他の見出しを参照する〕	〔同義語・対応語〕
〔語根があり、なお、他の見出しを参照する〕	〔そこまでの語根のすべてにかかる対義語・対応語〕
〔語根を囲む〕	〔その他〕
〔品詞が二つ以上あって意味の異なる場合、および動詞の自他を分ける〕	〔古語〕
〔新は新年を示す〕	〔新は新年を示す〕

あ

母音の「あ」。五十音図「あ行」の第一音。「あは安」の草体。「ア」は「風」の偏。

アーティスト *(artist)* 美術・技術。

アーチ *(arch)* (字義) 次ぐ。準じる。「垂直・垂直・垂直」。

アーチ [亞] *(arch)* (字義) 次位の。「一熱帶」。◎[ヒ]無機酸。

アーチ [屈] *(arch)* (接頭) ①(きの)の次位の。「一熱帶」。◎[ヒ]無機酸。

あいえ



[アーケード②]

なみの青葉をおおいた門。緑門。(3)野球のボーラー。

アーチェリー *(archery)* (洋) ②西洋式の弓を使ひて標的にして得点を争ひ競技。

アーティスト *(artist)* 美術・技術。

アーチ [紙] *(arch)* なみのふぢやのある厚手の印刷用紙。写真版。

アーチ [アート] *(art)* 藝術的または実験的映画。

アーチ [アーチ] *(arch)* 映画・演劇などの美術的

効果や企業などの広告などを指揮・監督する人。

アーベン *(Abend)* 夕・晩。あるトーマス開かねる夜の催。

アーモンド *(almond)* 植物学の落葉高木。種子は薬用や食用に用ひ。アーモンド。

アーマーチェア *(armchair)* ひじがけいす。安楽いす。

アーメン *(amen)* 確かに。【基】キリスト教で、祈りのあとに唱へて閉む。

アーモンド *(almond)* 植物学の落葉高木。種子は薬用や

食用に用ひ。アーモンド。

アーリヤーン *(Aryans)* [世] ①インドヨーロ

ーバー語族に属する民族の称。(古)中央アジアの原住者。(今)

アーリヤン *(Aryan)* ②イラン人の名をつぶ。

アール *(arc)* メートル法の面積の単位。(1)〇〇平方メートル。

アール *(earth)* 地球。

恩愛・慈愛・母性愛・偏愛・寵愛など。④異性を恋し思ひの男女が慕いあひ。『愛人・恋愛』②好む。心がかかる。『愛読・愛唱・愛玩など』②大切にする。『愛校心・愛護・友愛・祖国愛・人類愛』③惜しみ。『愛憲・割愛』◇母の子への「神の一」

あい [愛] ①かわいがる。『懐いわむ』。母の子への「神の一」

②異性を恋い慕ひ心。恋愛③ある事に価値を認める。それが打ち込む心。『学問への』④大切に思ひ気持ち。

あい [愛] ④(相) *(相)* ①だがこ。『一争い』②ひのい。『ひのい』。

あい [相] ②(相) *(相)* ①だがこ。『一争い』②ひのい。『ひのい』。

あいえんか（愛煙家）たばこの好きな人。
あいえんきえん（合縁奇縁・合縁機縁）ヒニン 男女、夫婦

友人などの間はみな思議な縁にまといもど。
（参考）似た意をもつことは一縁は異なるもの。

「一の松」② あいおい(相老)
あいおい【相老[い]】に夫婦がともに長生きゆること。参考同

アイ・オーリー【—OO】 International Olympic

Committee の路】国際本部へ、委員会
あいか【哀歌】悲しい心情をうたった詩歌。悲歌。ソング。
あいか【恋】恋の愛。恋の想い。恋の心。

あいなき【合鍵】一石の鍵に二つの鍵穴がある場合のことを。あいのかた

③能で、謡うたの様子方なはやし。

参考のは「敵姐」とも書く。

あい・かわらす【相変【わ】らす】かわす(副) 変わる。ほか。会
うへりにわらす。「山川」

あいかん【哀感】なんとなく悲しげ感じ。「一元氣で、喜」

あいがん(哀願)引(名・自スル)事情を述べ、人の同情心に訴えてよいのがうごと。哀訴。

あい・がん【愛・玩】ゲン(名・他スル)大切にしてかわいがり慰みとする。一動物

あい・き【愛機】愛用している飛行機・写真機など。
あい・き【合〔い〕着・間着】^{ヒツ} ①→あい・き ②上着と下着と

の間に着る衣服。
あいきーどう【合氣道】は、武道の一つ。古流柔術の大東流を
真流二二、並木一四市枝三三子の達者。合氣道。

源流也。當て身、聞、節、技を主とする講真術、合氣術、あいぎゅう【愛・敬】――〔古〕①〔氣品があつて〕かわいらしく、やさしく、優しく。②深く感ずる。思ふ。情味。

あいきやく【相客】に①同じ席にいる客。②宿屋で同じ部屋にとまつあわせた客。

アイ-キュー【-Q】 (intelligence quotient の略) 知能指数。知能の発達の程度を数字で表したもの。**[参考]** 100が標準。

あいきょう【愛敬・愛嬌】⁽¹⁾ ①明るくてかわいらしく穎敏な態度。②あいの心。〔「あいの心」は、2種類ある。1つは喜ばれるよな仕事。2つ目は、人に喜ばれるよな仕事。〕

あいきょう【愛嬌】⁽²⁾ 白目的放縱樂覺である。「一心」の間に、言葉方にまじて演じられる部分。多くは里人等に扮して、曲の主題を物語り、能進行を助ける。間。間語など。

あいきん【愛吟】(名・他スル)好き詩歌を吟じること。また、その詩歌。

あいくぎ【合釣・間釣】⁽¹⁾ 両端のとがったくち 板をうき合ひ、わせぬを使ひ、合ねせん。

あいくち【合口】⁽¹⁾ ①ほのまない短刀。鰐口など柄口などが直接に合ひ合ひたてのもの。丸五分⁽²⁾の様のよく合ひ合ひて「一の矢」の如き。②腰こなす相手。がくじい。⁽²⁾ 事例にはヒ首の腰を奪ひ、「一の矢」。一極立たる攻めの如き。

あいけい【愛敬】(名・他スル)愛しやまこと。「のを」。

あいかん【愛犬】⁽¹⁾ かわがでいる大。②大きかわがめこと。

あいかく【一家】⁽¹⁾ 相子⁽²⁾に、たゞに勝手角負ひなどいふ。ひきかね。相持。②國を愛する心。〔「愛國」目をかけて引き立てる事。ひときにする事。〕⁽²⁾ 一をだたる。周辺⁽³⁾愛顧⁽⁴⁾を受ける側からいふ語。

あいじ【愛護】(名・他スル)かわいがり大切にすること。動物⁽¹⁾・週間⁽²⁾・人間⁽³⁾の如きを愛する事。

あいじゅう【愛好】(名・他スル)愛し好むこと。切手一家⁽¹⁾・古い書⁽²⁾・愛國⁽³⁾自分の國を愛する事。

あいじゆ【愛惜】⁽¹⁾ 自分の國を愛する心持。祖國愛。

あいじゆう【愛護】⁽²⁾ 味方⁽³⁾そぞらあらかじめきめてある國のいじめ⁽⁴⁾一は山と川だ。②團体や仲間の主張を短い言葉で表したもの。標語。モットー。「当商店会の一はサンビスの山と川だ。」

あいさつ【挨拶】(名・自スル)①人に会ったとさへ別れるときにかう社交的なことば。また、その動作。初対面の一⁽¹⁾②敬意・祝意・謝意⁽²⁾を表す場⁽³⁾で人に述べる事⁽⁴⁾。また、その行為。「来賓の」⁽⁵⁾③対応。返事。受けたまえ。

あいさん【愛人】[基] キリスト教で、教員会がつしょに食事
あいし【哀】悲しき内容の歴史。また、その物語。悲史。
あいし【哀時】悲しき心情をもった詩。
あいし【愛用】親がわざりがうじゆの手供。シル。

アイシー・ジーハイドロ【ICBM】(intercontinental ballistic missile)の略。大陸間弾道弾。核弾頭を装備し、ロケットによって推進される約一万キロメートルの距離を超音速で飛行。戦略用長距離ミサイル。

あいじ【愛日】①冬の日光。②時を惜しんでおひるひる。^{アレ}③孝心の深きい。

あいじやく【愛着】①愛用の車。②自分の車を大事にする。③欲にまよわなし思ひきばねい。

アイシャドウ【eye shadow】目に陰影をつける化粧品。

あいしゃう【愛愁】青灰色な化粧品。

あいしゃう【哀愁】①もの悲しき。②悲しげの感じ。

あいしゃう【愛執】①「私」を愛するのに執着する上。愛着。

あいしょ【愛書】(日本)本が好き大切。「お家」の愛読じいじの本。愛読書。

あいじょう【相性】合ひの性。^{アレ}①性質があいまい合ひのと。②人の相手。③人の生年月日を陰陽五行説にあてはめた場合、男女双方、主従など性のと合ひのと。

あいじょう【哀傷】人の死悲しみ。^{アレ}哀悼。

一か【一歌】「古今集」以後の勅撰集の部立ばの一つ。人の死をいたみ、また故人を追慕の歌。

あいじょう【愛妻】^{アレ}かわいがつけるだけ。

あいじょう【愛称】正式の名前ではなく親しんで呼ぶ名前。

あいじょう【愛唱】^{アレ}名・他スル 詩歌や文章などを愛好みで口ずる。

あいじょう【愛誦】(名・他スル)詩歌や文章などを愛好みで口ずる。

あいじょう【愛情】①愛意。②心の氣持地。③ある事にひつぱりだ。それこそそぞろ情熱。「芸術家あいじょう」。

あいじゅうし【愛染】親がわいがつている娘。まだ子す。令嬢。周辺他人の娘じゆう。

あいじゆうし【合いの印】①他に結ばざよといひけぬふじゆ。②結婚で、戦陣で敵方と区別するために味方のつづる。

枚の布の端に合わせて間違えながら歩く。ついで、おしゃべり。

あじんじー【愛人】①愛する人。恋人。②情人。

アイス〈ice〉①水。②他の語「冠」と「かぶつ」の略。

—キーハンマー〈ice candy〉棒状の氷菓子。圓。

—クリーム〈ice cream〉牛乳・卵の黄身・砂糖・香料などを味わいの氷菓子。圓。

—ショウ〈ice show〉トイレスケートを掛け、水上に見せ物。

—スケート〈ice skate〉氷上を滑るスケート。

—ピック〈ice pick〉氷を抜くための鍔。

—ボックス〈ice box〉氷を使った手軽な冷蔵庫。

—ホッケー〈ice hockey〉大人ずの競技者がスケートを

はじめて氷上で走らせる。カタチが始まる。図。

あいす【愛す】(他) ①愛する。(→あいする) 因(サ義)

あいす【愛す】(他) ②(→あいする) 因(サ義)

あいす【愛す】(他) ③(→あいする) 特別の心。

あいす【愛す】(他) ④自分の愛する手(ほひるし)。信頼。サイン。

アイスバーー〈ice bar〉雪面が凍て氷のもの堅くなり

なる。圓。

アイスランド〈Iceland〉北大西洋北極圏附近の共和国。一

九四四年ホーフが独立。西名の通り雪と氷に包まれた島

で、水産加工業が盛ん。首都はハイアラル。

あいす【愛する】(他) ①愛する。(→あいする) 因(サ義)

あいす【愛する】(他) ②(→あいする) 愛する心。情熱。サイン。

アイスバーー〈Eisbar〉雪面が凍て氷のもの堅くなり

なる。圓。

アイスバーー〈Iceland〉北大西洋北極圏附近の共和国。一

九四四年ホーフが独立。西名の通り雪と氷に包まれた島

で、水産加工業が盛ん。首都はハイアラル。

あいす【愛する】(他) ①愛する。(→あいする) 因(サ義)

あいす【愛する】(他) ②(→あいする) 愛する心。情熱。サイン。

アイスバーー〈ice bar〉雪面が凍て氷のもの堅くなり

なる。圓。

アイスバーー〈Iceland〉北大西洋北極圏附近の共和国。一

九四四年ホーフが独立。西名の通り雪と氷に包まれた島

で、水産加工業が盛ん。首都はハイアラル。

あいす【愛する】(他) ①愛する。(→あいする) 因(サ義)

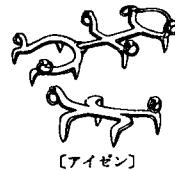
あいす【愛する】(他) ②(→あいする) 愛する心。情熱。サイン。

アイスバーー〈ice bar〉雪面が凍て氷のもの堅くなり

なる。圓。

あいせん【愛戦】(名・他スル) 争き戦ひ。

あいそ【哀訴】(名・他スル) なげき悲。



【アイゼン】

ふるう語をさう。哀願。

あいそ【愛想】(あいとうの想) ①明るい人や和やかな人。

②「のべた主人」(→のべた)。「何の事かおもてあわせた

人が「(尽)きる」(すこしあがやくなる)。「もう」も(尽)きる。

③飲食店の用語。(→のべた)。

あいそ【相次ぐ】(→のべた)。あとからあとから続

く(進)くる。「(相)繋が(→のべた)」。

あいそ【一笑】(→のべた)見限る。

一わらい【一笑】。相手の機嫌をわなねる笑い。おせり。

あいぞう【愛想】(あいとうの想)。〔笑い〕。

あいぞう【愛蔭】(名・他スル) 大切に保ついぢねんの一の

書」。

あいぞく【愛息】親がわがむすへるむすい。令息。罔述(他)

アイソトープ(同otope)。〔同〕原子番号と同じ原子質量の

異なる元素。同位元素。同位体。

あいそん【愛孫】(わがむすへるむすい)。令孫。罔述(他)の孫。

あいだ【間】(→のべた)のよのよのわた部分。②時間・距離の

隔たり。③ひきのぎの時間・空間。◎因縁。あいだ。④親子の

あいだの物事の中間。〔古〕…の…あいだ…申す

あいだの物事の間に。〔古〕…申す…あいだ…申す

あいだ【相手】(→のべた)。①人との結びつきの関係。「師弟の」②

血族・親類などの統義。〔姉妹の〕

あいだ【食】(→のべた)食事と食事との間に物を

食べる。〔古〕…の…あいだ…

あいだ【相対】(→のべた)向かい。二人だけで事を行ひる。

あいだ【相手】(→のべた)と相談の上でやること。

あいだ【する】(相対する)に(自)の。〔→のべた〕

あいだ【食】(→のべた)食事と食事との間に物を

食べる。〔古〕…の…あいだ…

あいだ【相手】(→のべた)向かい。二人だけで事を行ひる。

あいだ【相手】(→のべた)と相談の上でやること。

あいだ【する】(相対する)に(自)の。〔→のべた〕

あいだ【食】(→のべた)食事と食事との間に物を

食べる。〔古〕…の…あいだ…

あいだ【相手】(→のべた)向かい。二人だけで事を行ひる。

あいだ【相手】(→のべた)と相談の上でやること。

あいだ【する】(相対する)に(自)の。〔→のべた〕

あいだ【食】(→のべた)食事と食事との間に物を

食べる。〔古〕…の…あいだ…

あいだ【相手】(→のべた)向かい。二人だけで事を行ひる。

あいだ【相手】(→のべた)と相談の上でやること。

あいだ【する】(相対する)に(自)の。〔→のべた〕

あいだ【食】(→のべた)食事と食事との間に物を

あいにく【生憎】(副・形動)期待や目的に添わず、くあいわぬこと。おあいの運動会の当日は一雨だった。[因]相憎

し難いのは誤り。

アイヌ【Ainu】北海道・樺太(サハリン)・千島に住む種族の名。古いがえさ「えさ」と呼ばれた。

あいのこ【合いの子】間の子)に①へこんひに②へきり

じゅうの異なった種類のもの両方の性質を持つこと。どうかわいがなる。

あいのて【合ひの手】間の手)に①邦楽で歌と歌の間に三味線だけを入れる短い間奏。②歌ややの調子に合わせて、間に入れる音のかげ声。③会話や物事の進行の間にほぞ別などとは物事。「一を入ね」

あいのり【相乗り】に(名・自スル)一つの乗り物にいっしょに乗ること。

あいは【愛馬】①大切に、かわいがっている馬。(2)馬をいが

あいはん【合(い)判】(1)あいの(合)印)

あいはん【相判】(合判)に(1)さうのノートの大書き、紙の寸法。総約二一セントメートル、横約一五センチメートル。

(2)厚真の乾板で、中堅小判の中間に大きめ寸法。

アイバンク〈eye bank〉自分の死後、目の見えない人に角膜をもたらすために登録する機関。目の銀行。

アイビー・スタイル〈ivy style〉上着は(三)ボタン・ズボンは細めの直線的な服装。アビーブルック。〔圖〕ラフ・トルのアビーブルックのノートの大書き。

アイル【合符】に(1)手荷物を引き受けたを差渡す札。

アイル【名・他スル】(2)受け取ったままば、なまざなほ

あいひき【合(い)挽き】牛肉と豚肉をまとめて挽き肉。

あいひき(遂に)引き。遂に。団(塊)肉)に(名・自スル)男女が夫婦となる。〔圖〕ラフ・トルのアビーブルックのノートの大書き。

あいふ【合符】に駅で手荷物を引き受けたを差渡す札。

あいぶ【愛撫】(名・他スル)(1)まほほ、なまざなほ

あいひき(合(い)挽き)に牛肉と豚肉をまとめて挽き肉。

あいひき(遂に)引き。遂に。団(塊)肉)に(名・自スル)男女が夫婦となる。〔圖〕ラフ・トルのアビーブルックのノートの大書き。

あいふ【合符】に駅で手荷物を引き受けたを差渡す札。

あいぶ【愛撫】(名・他スル)まほほ、なまざなほ

かのじ)がわいがゆい。

あいぐく【合(い)服】(間服)に春秋の(い)着の洋服。〔圖〕ラフ・トルのアビーブルックのノートの大書き。

あいだな【合(い)札】に(1)わらふ(2)品物を預かったりするとして引換券を発行する。

あいべつ【哀別】悲れ別れ。別れを悲むこと。「一の情」ばかりしがれ。

あいべつりく【愛別離苦】(仏)八苦の一つ。愛する人と別れる苦しみ。

あいべや【相部屋】に宿屋で(他人と同じ部屋に)とまる。

あいぼ【愛慕】(名・他スル)愛する意の。恋慕。

あいぼう【相乗】に(1)つしあなたの仕事や行動をするが。べー

トナー。(2)がをじこじかつかの相手。相肩。

アイボリー〈ivory〉①象牙。②象牙色の厚い西洋紙。

あいまた【合間】にあいだ。ひま。用法多く、時間について使つ。

あいまたがい【暖昧】(1)意味。〔圖〕ナラ。(2)はあつないさま。

あいまたがま【暖昧度】+明瞭。〔圖〕ナラ。

あいまたごと【一模糊】(1)物事がはきしなま。

あいまたがて【相俟つて】相互の力がいつしょになつて。「両々」境遇(たがい)に同情し助け合ひの事。「困った時は」

あいまたがむ【相思】(1)身をまどふの略。(2)相思互い。〔圖〕ナラ。

アイモ【Eyemo】『ース映画用の携帯用三五ミリ撮影機。

(商品名)

あいもち【相持ら】に(1)たがい持ち合ひの事。(2)費用を平等に負担する。〔圖〕ナラ。

あいもく【相候】に同役日。同じ役目を勤める人。同役。

あいもど【相宿】に同宿。または同じ部屋に泊まる。〔圖〕ナラ。

あいよう【愛用】(名・他スル)好みで用いる事。つかつて。

あいよし【愛欲】(1)異性に対する欲情。(2)「欲望に愛着」または執着する情。

〔圖〕ナラの化粧。

アイラン【eye line】目の奥の引く線。(目を大きく)

あいらぐ【哀楽】悲しみ(樂)よ。喜怒」

あいらし・い【愛らし】(形容詞)かわいらしい。

〔圖〕ナラの花。かわいらしい。

あいらん【哀憤】悲しみ。(いじみ。

〔圖〕ナラの花。

あいいろ【陰路】(1)まほほ(2)道の物事をすめじよ上で

分を上る共和国。一九四九年イギリスが独立。牧畜が盛ん

て畜産品が主要輸出品。旧称はエール。首都はダブリ。

あいれん【哀憤】あれぬ情けをかげる。〔1の情〕

〔圖〕ナラの花。

アイランド【Ireland】アイルランド島の北東部を除く大半

分を占める共和国。一九四九年イギリスが独立。牧畜が盛ん

て畜産品が主要輸出品。旧称はエール。首都はダブリ。

あらわに用いる道具。2種の毛筆を並べる小型のもの。

あいわ【哀語】喪な物語。悲話。

айншタイン【Albert Einstein】(1879)理論物理学者。ドイツ生まれのユダヤ人で、一九〇五年光電子仮説特殊相对論を発表して一般相対性理論を完成し、一九二一年ノーベル物理学賞を受賞。のちにナチスによる各人排斥運動にあいのと命んだ。二〇世紀最大の理論物理学者で平和主義者として世界的に活躍。

あう【合(う)】(1)めぐらしく集まつて。(2)めぐらす。

あう【合(う)】(2)めぐらす。(3)めぐらす。(4)めぐらす。

あう【会う・遭う・遇う・逢う】(1)めぐらす。(2)めぐらす。

あう【会う・遭う・遇う・逢う】(3)めぐらす。

あう【会う・遭う・遇う・逢う】(4)めぐらす。

あう【会う・遭う・遇う・逢う】(5)めぐらす。

あう【会う・遭う・遇う・逢う】(6)めぐらす。

あう【会う・遭う・遇う・逢う】(7)めぐらす。

〔圖〕ナラの花。

